

明石の史跡（77）相之山



江戸時代、加古郡の東端に位置する東二見村（現明石市）は、港をかかえ、平野部に展開する集落であった。周辺に入会山がなく、北隣の福里村や、福里の西に隣接する二子村（播磨町）も同様であった。入会山がないということは、農業経営に必要な、肥料としての落ち葉や下草の採集が出来ないということである。この三つの集落は、以前より、蛸草郷（稲美町）の六分一（ろくぶいち）村の相之山（あいのやま）を、入会山として利用していたのである（兵庫県の地名Ⅱ／日本歴史地名大系29Ⅱ、149頁）。

入会山（いりあいやま）というのは、「一定地域の住民が特定の権利をもって一定の範囲の森林・原野または漁場に入り、共同用益（木材・薪炭・まぐさなどの採取）すること」（広辞苑）で、むろん利用した場合は、その代価として「山手米」（山の収益に応じて村から納めた税＝広辞苑）を支払う。

天正6年（1578）10月、平井山（三木市）に城砦を構築した秀吉は、本格的に三木攻囲戦に取り組む。なによりもその年に収穫された新米の、三木城への搬入阻止を考え、加藤光泰を、蛸草郷に派遣して、糧道の遮断を実行した（寛永諸家系図伝9、72頁）。

相之山は、東二見港から北へ4キロ。JR土山駅から2キロ弱の地点である。しかも域内を東北に三木街道が走っている。収穫後の耕作地の手入れのための施肥は、欠かせない。東二見村をはじめとする村々は、困惑の色をかくせなかったであろう。

三木落城直前の天正8年（1580）正月8日の夜から、郡界の瀬戸川の東、魚住地区に、秀吉は攻撃を加えている（反町文書）。東二見は、その攻撃からまぬがれた理由のひとつに、相之山の存在も、無視できないのではなかろうか。